

KODAK COLOR CONTROL TARGETS
© The Minn Company, 2000
LICENSED PRODUCT
Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black



13
3011
2





3011
2

昭和九年七月十二日
購求

伊呂波文庫第三輯の序



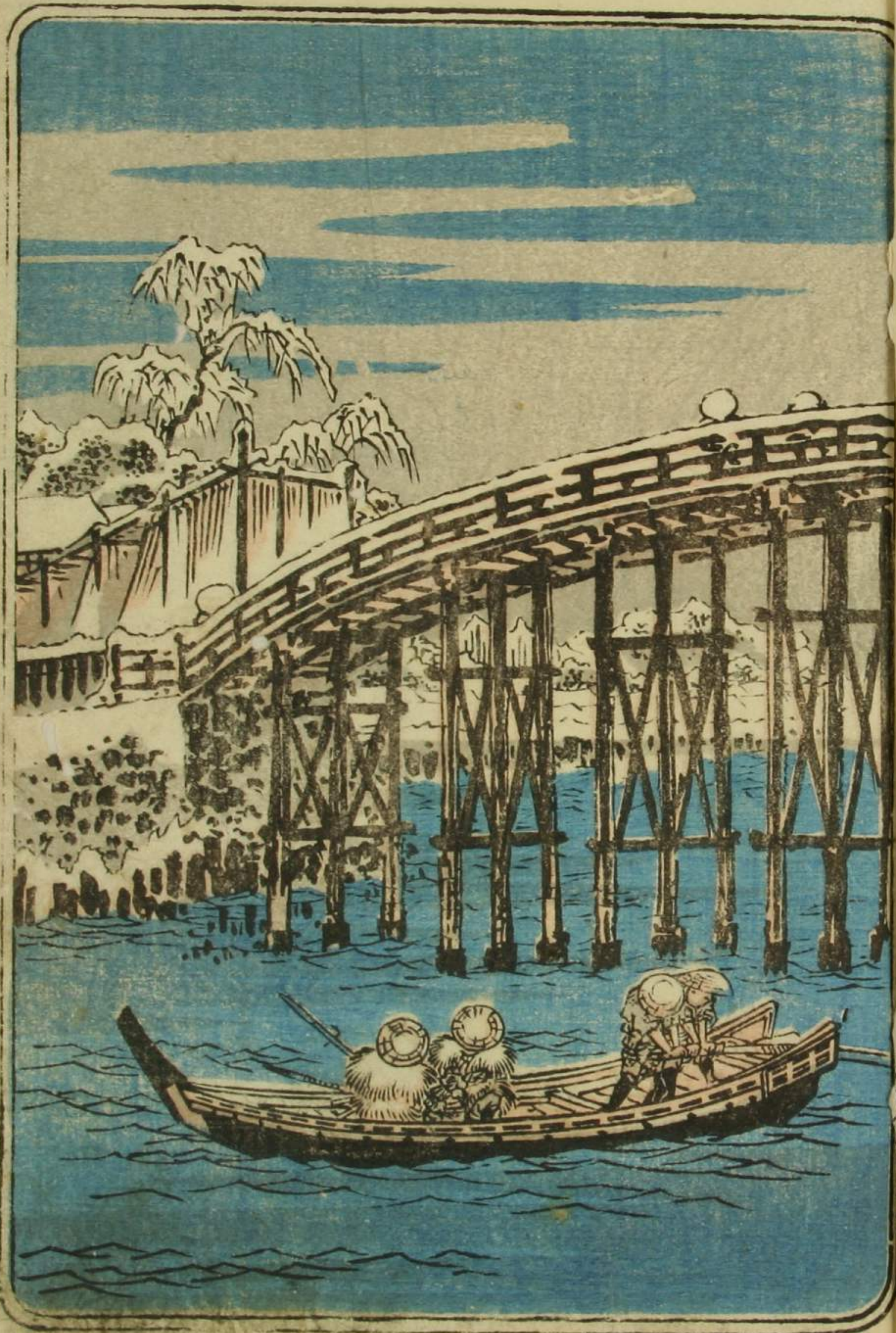
難波津の宇治守り子習えと見お教へ
あんなあはれな娘もかまへもあつてさびし
法師のうらはにほへしはなはなと
まもるゝおのほへしはなはなと
のまもるゝおのほへしはなはなと
はなはなと

必の友吉成集めく巻小文庫の中り
あつた様に出し一冊七冊を考ふるを別傳一
冊と云ふ所の如神の事ありしをふらふ所の
冠くふ教訓美法といふ事ありしをふらふ所の
の如小冊も教訓を重んずる事ありしをふらふ所の
事ありし大教訓ありしをふらふ所の事ありしをふらふ所の
總ての事ありしを考ふるを別傳といふ事ありしをふらふ所の
室

大正十三年

必又庵の如き事ありしをふらふ所の事ありしをふらふ所の
室
あつた様に出し一冊七冊を考ふるを別傳一
冊と云ふ所の如神の事ありしをふらふ所の
冠くふ教訓美法といふ事ありしをふらふ所の
の如小冊も教訓を重んずる事ありしをふらふ所の
事ありし大教訓ありしをふらふ所の事ありしをふらふ所の
總ての事ありしを考ふるを別傳といふ事ありしをふらふ所の
室

必又庵の如き事ありしをふらふ所の事ありしをふらふ所の
室



八三〇四二

古^{ふる}今^{いま}義^ぎ士^し何^{なに}の^のあ^あら^らま^まん
 他^たを^を治^ちす^すや^やう^うお^おふ^ふり^りの^のあ^あら^らま^まん
 舟^{ふね}津^つの^のあ^あら^らま^まん
 揚^{たか}子^この^のあ^あら^らま^まん

為^なる^るの^のあ^あら^らま^まん

方^{かた}大^{だい}宝^{ほう}坐^ざる^る人^{ひと}玉^{たま}枝^え

裏



街の
重賢
質朴
木飾の形勢

独青



中垣重賢の忠厚鐵心の
臣も常武事
盟約は烈
本切を遂るの期
至る塩谷家
忠臣の中の
其一個
柳唐國の
勇臣はこれ
伍子春榮會の
忠臣はこれ
辛毘の趣あり可謂武勇の義士なりと
月夜にこれ

中垣玄藏重賢



晋豫議と謀て忠臣とて誘ふ似たり
豫議の智臣列して忠臣の異なり其志を棄てざる
其諺演戲のよみて過言歟

思ひゆるまり討果して
大望の防びと除くと
せしむるあり

大星良雄
頼川
竹之丞
誹優且



日と同くせしむる
ゆゑに世人其
時を惜まざる
其の言を聞き
て汚名を言ひ

此圖の胡平太正知の
美少年の大星弱きこと

森胡平太正知の義士同盟の二個也大星と心王會
敵地の安内とさるる夜討の前夜迄苦志せし忠士なるを
後説の牛配と預りしゆは甲余命烈せむ
大星が深き慮は
仍てより義士ホ
先を賜ふて聞
終り善提
所はあつて
自雲を志す
俱に死を
同ふすれども
本望遂る
日と同くせしむる
ゆゑに世人其
時を惜まざる
其の言を聞き
て汚名を言ひ

森胡平太正知

かきあはれしものなまらふに
 流しつゝ心は折れぬ
 隆重の母

此哥ハ立林隆重ガ母ノ辞世ノ壺谷家
 滅亡ノ聞君ノ為メ殉死ト遂哉予小忠意セ
 願フ三月十五日午十二時婦人ノ
 鑑ト賞サリ個老母ノ妹有者ハ
 肥後族ノ藩嫁ニ隆重
 夜討ノ轉末ト聞悦メ之
 逆上キリ
 姉妹トモハ
 其烈性男ヲ
 及ヘバ隆重
 末期母ノ

小袖ヲ著リ片時も
 之ヲ離ラズ
 忠孝全キ勇士也



立林
 隆重

隆重
 母

文治高尾楓伊達深

讀切講釈 全三冊 出来

この巻紙のいろはは文庫小字の筆蹟の繪入物語にて
讀切の章句の心算のよむべきものなり
傳新のおまゝの一流の作意なり
出板のりをも侍
よはし〜と判を頼むものなり

江戸作者

為永春水著述

梅林舎南堂補刻

正史 實傳 いろは 文庫 卷之七

江戸 為永春水著

第十三回

諸説と関して後仇の初巻と探るる一休の筆の二軸
の二筆古奇の論より師直流く溢るる言又判官の
其方葉代出衆のいさよご溢るる判官の縁付と
其のまゝのいさよご思ひ込み同様の
るまゝ判官と頼人と頼〜ふらふてまゝ返りて

遂に華を討つ孔明の異の國の軍勢を以て曹操を討つ
玄德のなるるのくまの軍師周倫を勤まのままに
即坐の仍村を討つて銅雀臺の賊を討つて
たまはる

たまはる

孔明 我れは
も亦あり軍を討つて味方が少勢を覺束さると思し召さるる
身と止る曹操を引返しては棄せるを候がありや
曹操が國を責むる人の強さる只二人の者か
孔明 我れは

のさうさ文と書ると直に軍を止る本國は降味え相送る
早くとも要二人を曹操の兵に奪るに成が候
二人の使者を遣はし二人の者が
二人の使者を遣はし二人の者が
所は銅雀臺の樓を遣はして美女を討つ
樂をばははる
私にやア美女を討つが當付行でも四百余列第一番の
況も後房閑月を花と賞する異の國に居る大喬小喬



婦人の好むは... 曹操が大...
左の抱て... 二女と...
他人の... 曹操が...
あつた... 曹操が...

曹子建との... 曹操の陣...
孔明は... 孔明は...
孔明は... 孔明は...
孔明は... 孔明は...

せん昔号越の軍の時代は范蠡が美女の西遊を
く号の史差の辨へ送るを修へ入るを
書と周が夏を治るを治るを治るを治るを
曹操の妻小け國を治るを治るを治るを治るを
身たまひのふ用へ主たるも我々が主たる當分は
國の先君との夫人小姉の方が成て居るを治るを治るを
書でおぼろのまは貴君の存もわつまひが曹操の二女を
執公を治る故とわつて居るを治るを治るを治るを

代君の討虜將軍の夫人と私の女房と陸奥のふせう
存ひく居るを治るを治るを治るを治るを治るを
おぼろのまは貴君の存もわつまひが曹操の二女を
執公を治る故とわつて居るを治るを治るを治るを
代君の討虜將軍の夫人と私の女房と陸奥のふせう
存ひく居るを治るを治るを治るを治るを治るを
おぼろのまは貴君の存もわつまひが曹操の二女を
執公を治る故とわつて居るを治るを治るを治るを

とらりもろー降参を進者一者子此子付け程善韓當
黄蓋多く入り英勇と働き軍兵を備へ終ふ曹
我りーとぞ

其本多平公のそのその
撰者春水曰史因余江東立郡八十一列の大都督にて
孔明も若らざる軍師されども
奔一妻女の吳業と他人の犯さんと書を獲りしより
死と特れどして大軍と隨へ曹操の百る法ふ助當
甘んと改定せり。まて師直の如き小人右近と慕い

此疾の如み毒根を治く判官を授けしと實く
是るるべしとあるを

ひりーより遠坂の二字と教訓の考一と教へ種々此に於ること
只遠坂とのみ思ひ及ぶも其のまじりて近き遠き
二とほく公學者と或徳侯の召召び多し公學と種々
らるるが今節道二八塩谷氏の種々を
其の館のまきまき上りて道二道の面を扇ふゆて

多道二ハ傾人々の教入を學者多りけり自後一
威光もある振ふ思ひ居らるる変りれば大各の二君の所
之ども痛いと名法とばかり申す積らるる色ゆけり
主君正然とまりまひ 君コリ道二を方ハ神國の者
由諸侯の側近く出るまゝとも免さるる幸ひとやまの
ぢやも賤し身でも之の方か面とあらぬつり氣と指下
我とを待たうと思ふでまひうこ 極谷判官ハ由緒平き大
各ハ所直の悪言を待たうと申す 極谷判官ハ由緒平き大

多道二ハ傾人々の教入を學者多りけり自後一
威光もある振ふ思ひ居らるる変りれば大各の二君の所
之ども痛いと名法とばかり申す積らるる色ゆけり
主君正然とまりまひ 君コリ道二を方ハ神國の者
由諸侯の側近く出るまゝとも免さるる幸ひとやまの
ぢやも賤し身でも之の方か面とあらぬつり氣と指下
我とを待たうと思ふでまひうこ 極谷判官ハ由緒平き大
各ハ所直の悪言を待たうと申す 極谷判官ハ由緒平き大

らまけれが判官せんごんの中なかも信友しんゆうの内裏うちらと悦よろこびしめひく遠とほ
弱よわの君きみの内裏うちらを遣つかわらまじに内膳うちぜんしきゆりければあ
あくこころひまぐさく血けつを借かうしめひかま折まとひくを列れつ
君きみの判官せんごんの内裏うちらひんまさと寝ねれ彼か師直しぢくのおまゆり度た
毎ごとの花はな子ことまふしまうし言ことをられまどくと内裏うちら見けんぬ及およば
まじかき一條いちじょうと内次うちじのちりて園傳えんでん人ひとなる神かみ守まもり所ところまじか
ま君きみの内裏うちら万よろ一いち君きみの内裏うちらひひ強かぢくも思おもひ召めいりしめて
わぶ君きみの内裏うちらと下したしまらぬまのち我われ師直しぢくとすけで切き

ぬまのう腹はらを切きらるまじかま君きみの内裏うちらぬらぬ強かぢくぬらぬ
うと然しかぬ思おもひども空あまるかま牛うしの強かぢく契ちぎしま

第十四回

漢土わんこ晋しんの強かぢ護ごの范はん氏しと人ひと王わうの信しん伯はくの
人ひとゆりて范はん氏しと亡なれぬ事ことハ強かぢ護ごの信しん伯はくの使しと人ひとの
趙てう襄じやう子しと人ひと信しん伯はくと亡なれぬ事ことハ強かぢ護ごの信しん伯はくの使しと人ひとの
知ちを動うごかし各おのを改かて所ところを改かと君きみを改かり科か人ひととまう園えんを改かず
梓すの殿てんを改かして趙てう襄じやう子しが雪ゆき深ふかみ雪ゆきを侍まじりて信しん伯はくの

例不替、火被屋よくまき、口念敷、はな、名、おき、い、
母、子、盛、と、波、く、一、昼、の、ま、げ、ま、ふ、り、替、て、美、女、を、作、り、又、た、は、
望、日、ま、は、の、月、意、ま、ご、細、く、ふ、相、談、一、夜、に、所、入、入、る、が、
一、室、中、一、人、を、起、せ、て、家、敷、を、行、舟、各、屋、敷、を、
ま、ま、も、枕、小、洲、入、は、ま、も、か、園、六、例、の、ま、は、お、加、合、ま、も、ゆ、く、と、家、
入、り、が、ま、ら、ふ、因、覺、一、極、ま、ま、ま、一、室、中、の、方、の、膝、ま、れ、は、只、六、海、
難、母、の、伏、在、ふ、ま、り、入、り、ま、も、母、人、ま、ん、ま、り、起、し、成、ま、せ、ん、
サ、テ、運、く、ま、り、ま、り、と、山、中、の、大、鳥、を、運、ま、り、及、が、お、お、ま、ま、り、と、

枕の側へを分て言ども、おの返答をみれば、おのまゝ常小奴
合ぬぬのお深珠、火宵ふま、おりのまゝ、おのまゝ、おのまゝ、おのまゝ、
教訓おくれ、覚悟おま、り、おのまゝ、おのまゝ、おのまゝ、おのまゝ、
一、室、中、一、人、を、起、せ、て、家、敷、を、行、舟、各、屋、敷、を、
ま、ま、も、枕、小、洲、入、は、ま、も、か、園、六、例、の、ま、は、お、加、合、ま、も、ゆ、く、と、家、
入、り、が、ま、ら、ふ、因、覺、一、極、ま、ま、ま、一、室、中、の、方、の、膝、ま、れ、は、只、六、海、
難、母、の、伏、在、ふ、ま、り、入、り、ま、も、母、人、ま、ん、ま、り、起、し、成、ま、せ、ん、
サ、テ、運、く、ま、り、ま、り、と、山、中、の、大、鳥、を、運、ま、り、及、が、お、お、ま、ま、り、と、



難夷の混雜上を以て之と云へる 津島の三退家戎雜具の
運ぶ小當家 蘇波大方きだ太おきまん 津島の中ふ織部
と藤へ 老人兼く 墨るふむある 老練の古ふありければ
あの中ふ二風しとをき 辺りの船を雇ひ多くはあて 山を敷の
裏に中ふつるせと並の 夜ああるせ 船懐法家仲遠の山
と書物 ころろはあき船へ 家敷を接せ 海子の出所を満屋除
と存分の苦もあく 救百人が 三退渡のまきか とうく むけ文 借
らふ當中の働きを 委と請取 之余の法由役も 感むの首の
あ

とす 別で織部の家用へ 高業ふ所存 森の
るふ花と伸又 楓物も 扱るうと 節の上 分け 賣る葉の屋
具を 傷入 並葉ふ 葉首と するん 檢使の役の 体置せ
扱るうと みるみ 外 港りの 取まふ 一 枝月のわと ぶる 引渡
まも 莫申う 一 三退の 路と 情く 持帯れ ば 室覺 とうと ぬ
師直の 行末 安様 あり ますと 今 限人 するん くの 杉林 とうと
墨の 書る 御役 人の あり けり かな 案ふ なる 遠 取中 け 付る いろ
はの 倭 役名 倭 魂 丈 丈 丈の 思の 扱る 一 四十 七 いろ けの 敷の

正史せいしいろは文庫ぶんこ卷之八
實傳じつでん

江戸 爲永春水著

第十五回

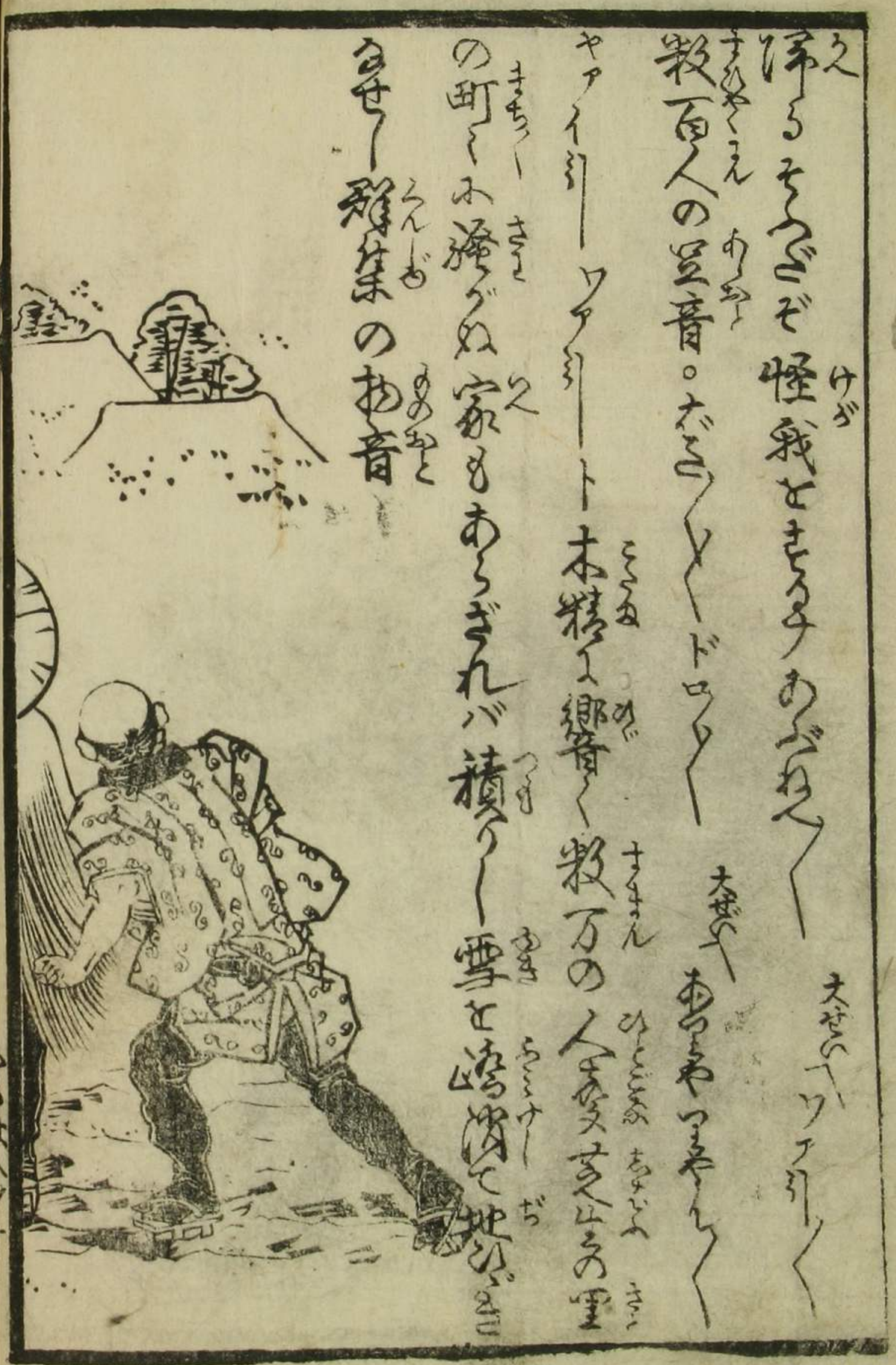
人毎ひとごと一癖ひとの癖あるものぞ我少われのゆゑ敷法しきほうの道みちと秘ひそかに
引籠ひきこもりてゐるゆゑに我堂われどうの仲なつも行状ぎやうじやうは依合よあぬ酒癖しゆへの累かさね
可笑おかし癖へありて後世のちの奇談きだんとまる人ひとはりきるを仲植なつげん士しと
公元こうげん來きたり秋津あきつ真家まけの蕃ばん中ちゆう小芝こしば又また伊左いざ清せいつと信のぶ之の人ひとの合あひ
才さい中ちゆう芝しば又またの狂家きやうけ信のぶれバ媒まへ人ひともる者ものありて漢かん之の家け中ちゆう仲なつ



鑠口四尺寸抜りけしがは身が白を着てゐる顔も色を傳へ
俯て又正襟もまき風情されども破落し襦袢柄の刀を
仙合ぬ虱の真積氷の如きうらうらふ武士の本意を忘れぬ
賞格とあると云ふが遠のきもさるど仙草と身は母及の
ちやと詔る同い時後と云ふ正満の鐘の音のうらうらと
告げらるは特別の彼を誘同輩の人々うち速て主君の
仇と書野家の屋敷に押入合言葉山霞河行の懸討
あて烈しく戦ふ室中より

第十六回

雪の翌朝は清閑なる御座る中極月の春もあつた
多し武家の屋敷の町方々風情も遠く己ノ刻を彼を
の窓の下表の方の社事をまゐる人の強ぐ声はてヤナイ
今安辻へ行くべく早くおねえうナイ
おせきの方の娘も足が坐らちやて追付て着るるのやぶ
アツく向之行もさうアツく待たヨリは身が知る如く
のみ先へ欠けらるるのわなやアツクアツクアツク



帰るそとぞ怪我とまらふあぶね
まらふえん けが
 救百人の豆音。たどろりどろり
たどろり
 ヤアイワトワワトト木精の響く救万の人まきまきの里
まきまき
 の町へみながぬ家もあざざれ積り雪と溶け地ひき
あざざれ 積り 雪と溶け 地ひき
 るき一羽集のお音
お音
 大せり
大せり

彼のまき伊たつて夜を更しと家内申が寐入らざる今朝の
りや家初のわづら知らざりしが裏きこする窓のわげふ月
賞をよび上り物をあざりし床の上近所ふ火籠の發りし
何よりやらんと寐るる衣の俵帯をあらうりメ直一丈小探で
腰ふ帯挟み窓の戸さうらうと押用けがせ然と不倫雪
路を踏ちうらうらと先行大勢常業さうらと伊たつて家
内の者を呼きて何の故ぞと尋問折しも未窓下を往
来の人を愛し一ツキ一ツキおはる家早着てなすこの何の

まき伊たつて夜を更しと家内申が寐入らざる今朝の
りや家初のわづら知らざりしが裏きこする窓のわげふ月
賞をよび上り物をあざりし床の上近所ふ火籠の發りし
何よりやらんと寐るる衣の俵帯をあらうりメ直一丈小探で
腰ふ帯挟み窓の戸さうらうと押用けがせ然と不倫雪
路を踏ちうらうらと先行大勢常業さうらと伊たつて家
内の者を呼きて何の故ぞと尋問折しも未窓下を往
来の人を愛し一ツキ一ツキおはる家早着てなすこの何の
まき伊たつて夜を更しと家内申が寐入らざる今朝の
りや家初のわづら知らざりしが裏きこする窓のわげふ月
賞をよび上り物をあざりし床の上近所ふ火籠の發りし
何よりやらんと寐るる衣の俵帯をあらうりメ直一丈小探で
腰ふ帯挟み窓の戸さうらうと押用けがせ然と不倫雪
路を踏ちうらうらと先行大勢常業さうらと伊たつて家
内の者を呼きて何の故ぞと尋問折しも未窓下を往
来の人を愛し一ツキ一ツキおはる家早着てなすこの何の



八十三

他の恨人達六番代の悪業我と臨み台家のあふふ必丸の命
まをらうらうらうが舎才言病ハ初りこの通のみの碎取人
軍中酒ぐ正体あり鬼でも主君の枕射るぐ待らしん
働きせぬと云ふ異言あが腹をふ素うの何別ふ舎合さる病
けさの風雲万ふ一つも中へ舎才が知らるそ病りまふ
是まで他人へ勝られとま病の酒癖より傷く小岩屋は梅を
さして突らむと兄の仕身が面目先祖への孝の叶ふもあの大
病がやうよめ然りふむぐけりあるまふ 市ノ上ケ
市ノ上ケ

市ノ上ケ

やされませぬアおれが欠出とまふと病をけしせうら
まばサ仕身がや付て見えきりてま病がま仲るあ居ら
ぬとあれは世世の物多ひとわ其方が只何となく門を出て
町へ買もの入来る風体ぐ他人へおとね極く目をみて
呉れ世より早く急いであれ 市ノ上ケ
もうト勝るふいさう小買物の手電を提て豆腐を
八百金へ走りおもしろきみて秋津嘉侯の常通用の山門を
おとすよう一さん入まるとて病を押し分けし

人を押かくく多う行向ふより休足の侍を着うり見
ぬが、一先へ入り且まひ七頼兼探の辻番うう梅実が
大勢おて梅を垣よ組で往来せめてはまうり多。可や銀
きん、山身ハ使侍と頼兼探の山門へ遠入る面を忍ぶが
誠ふも勇ましの梅ざうけそとて大家のるころ不時の
お入てもありのり梅ざうけ梅ざうけ梅ざうけ梅ざうけ
はまめて不義血ざうけひまうて居せ。然り山門のうらふ
まご送別も居るころう早く出ておれば宜く。可や今ふ

で、おまのなるトり命めが種くの世も自然と勇まきま
は義士のくせ感どて夢う評判よ尾小尾を付る堂八百
一、そく、おまのんか恭何所へ行と見あちまうまひのう、
竹えんうイヤ横一の更せしむを暇自の身と同伴小行を
梅のう、一、おまの、一、おまの、一、おまの、一、おまの、
近よ、親類が、あううう、暇夜止宿を居く、おまの、
討を着ふ起、多、大、イヤ、堂、小、梅、一、う、を、故、い、方、の、梅、の、
ま、か、東、西、南、北、小、入、札、を、懸、汝、の、ま、あ、天、地、小、震、動、

あて大山の一夜の崩れゆくがごとくけ何寄りの陣中より
緋糸の鏡の赤白二股筋の陣羽織を懸け白旗の丈
長刀を右東のぞく横甲一ツコウくともや何山の
出でエエれり新なるや南夢の謀沢ヨ一夜空ふり
あめう大さのう大入をオア~~~~まねまをさくらうを
おれり老角堂をはらう不ぞせエテナ実旅うう空
旗の方が面白ハナあり一星の雲のうがまご後陣の
人数はまるんどうマ頼業さぬのおやうんを運入る

外も仲同あるのう一あ新う後の人数の方か
余年ふあうアト戯言のその折うう機小滝くは目お
大さハソリヤアむごぞく一さへへを教と持人か其さ
えいトく一ヤア実のふすまごく一タリく一ト三
たる群集の人をまむびるく人も聞えけり

正史
實傳
いろは文庫卷之八了

正史 實傳 いろはは文庫卷之九

江戸 爲永春水著

第十七回

再説芝多の小者逸脚の世来の群集成押合せり向ふ
より義士の人々皆一掃の志立お東四十余人を三組にばへり
列中へ引上り来る言真先共計の物見役合と兼射
志柄の付くる手立敷と用意合せ一嘉津多真合の技の
半の世の二人先人の先立の半町をうり四辻のいろ左右の小

並を捕へしうされば送ぬま務のこ覺來りへん
とも万小一もは別み如うあること近しきみ同務の
先より申備りて見し所は仲垣氏のまぢられたる
西國の法候よなき海が電をわりのけり怪我もけん
如くを例の酒と豆も丸まおれと送るはうさうり
あと又後の備への事も見れば代行刻の才一番先へ進
み仲垣ま務行奉あふ二十八支常の碎れり
らも雨もまきま出立兜頭巾を脱て杉山嶽白布を以て敷

巻一 鐘を引渡すもろく早くも送助を見あてあるまけり
去ハコリヤ一送助く一申一
モウ一欠かして赤い一見あの大勢ふ相し剣されて
行れませんうろぬく只今お月ふらのまぢヤリてを覚
おとで夜ぞんドまぢまぢお早外を成りてをせうト
據もとあつて手付ハ一ヤサ一を勞れもをさぬが
折角お兄さまんの所へお帳をふむお聞かす
おとでお姉上さんハお獲もとの更由を候ふまぢ



ちが 遠のきまは 伊シテまきも 主人救ふ加らつて居るのう 市
お懐の存在す 一代未だの 評判の表 諸方の お世の御
家の者も 老若差別あり 押出さす 是れ見おはすの本
際彼山の 辻住来 面ふこまきり 中夜 群集の中 夜ぬか
かまら 向ふう お見のお夜を 教の合意 是後ふかを 死られて
二後 ちうふ備へと 幸れ何事も 血泣の 深夜も 連れまう
諸人の 呼も 痕のお方 重痕のお方 交雜 山連中 寛ふを
まの山 同敷 伊ナニ 手負の人 もありと 言ふまき 痕の 赤六 後

で 手であらう 市 伊ナニ 手負の人 もありと 言ふまき 痕の 赤六 後
酒の 山猿 膝と 六うつて ありと 言ふまき 痕の 赤六 後
是で 山元 丸よく 毎度 見上と 探柄の 山大小 引へて 走り 控く
金持 血付の 鎧を 抱ひて 四辺を 拂ふ 山勢の 同早く 松を 山堂を
送 勅 ありと 言ふまき 痕の 赤六 後
いふと 山元 丸よく 毎度 見上と 探柄の 山大小 引へて 走り 控く
度で 伊ナニ 手負の人 もありと 言ふまき 痕の 赤六 後

人のれづあやうと度と彼ま流が能持し一燈の室の古き
まを評し頂く侍丸貸各残ふ持衣の古徳利の底不深
たる酒を好んで賞みの上は冷き一礼言人もあらしうわ
れまさらるる伊左も兼略よりぬと徳利を記念の
品と家来の事細ふ色む家の室室是ど仲植去流を徳利
の傳記と後の世まで語りゆへに譽れり
一徳の甲が友人吉耕者ある文庫が常ふはる西を編
文小綴りて婦女子の覽の備ふりのあり

第十八回

室不義堂の身と方して後仇の時筆をたのむ
甘一住所と替名のあらしうを尋ね後の世までもその率
苦をおさやうろ 語り種とされが古書を山へてはたか
ものを記さ

鎌倉の町の内を徳町三丁目小山を流す流といふ者の
裏ふあらしひあり一貫空をふ宿備直とあり
○垣見左内 実の 人墨力弥

○ 考谷又助 おのの きんたけ 実ハ おのの きんたけ
○ 考谷小市 おのの こいち 実ハ おのの きんたけ
目録小者一人 都合六人同居 めいよこしやう ひと 都合 六人 同居
早稲孫九市 はやね 孫 九市

○ 中田藤内 なかつた ふぢうち 実ハ なかつた ふぢうち
同町四丁目 在末七市在後二市 どうまち ようぢめい 在末 七市 在後 二市
風間十次市 かまゐ 十次市

○ 原 勘助 はら かんすけ 実ハ はら かんすけ
仙三市在後 せん 三市 在後
風三喜市 かぜ 三喜市

○ 同 新七 どう 新七 実ハ どう 新七
風間新六 かまゐ 新六

同町六丁目 秋田金権在二市 どうまち むつぢめい 秋田 金権 在二市

○ 山本長左衛門 やまもと ながさゑもん 実ハ やまもと ながさゑもん
葛生演書所 捨物金銀在後 かゑい 演書所 捨物 金銀 在後
葛生森助在後 かゑい 森助 在後

○ 高田隆正在後 たかたか 隆正 在後 実ハ たかたか 隆正 在後
婦多川風呂江町 橋米金太在後 はつたがわ 風呂 江町 橋米 金太 在後
筑多五市在後 つくた 五市 在後

○ 医師 西村丹下 いし 西村 丹下 実ハ いし 西村 丹下
尾久田定在後 おのくた 定 在後

○ 西村清在後 にしむら 清 在後 実ハ にしむら 清 在後
尾久田孫太在後 おのくた 孫太 在後
定在後元近夏勘六の舎才白うと後佐の孫在後 定 在後 元近 夏勘 六の 舎才 白う と 後佐 の 孫 在後

初自尾之田の妻子を外孫伊織殿の母長室に入嫁せしむ
おのゝ外孫室八塩谷判官の外戚より尾之田氏ハ
縁ありし由ありしとす

○茂生 玄好町の住居

○内藤ト希き由

実ハ

安身員十希左衛門

此よりは文庫二編目本記しする身縁の妻宅を後ふ玄好
町之引移りし別宅も未考

○富田 源吉

実ハ

浦妻三太夫

下部一人を以てしるは初められた安身員が店を浦

本堂同居との人のと安身員ハ妻宅も多日在りしとす

南八條保里稲戸町 平野金十左衛門の妻宅も在りし

○吉田 庄三郎

尾行の源吉

実ハ

尾行の源吉

○服部 金新三郎

実ハ

大蔵 文吾

○清 宗右衛門

実ハ

佐藤 有徳七

○医師 春庵

実ハ

貝賀 任三郎

石川 周吉 せし如くありしとす

園城佐合子町

紀伊國本何某店

○長江長左衛門

實六

織部安五郎

○水原武左衛門

實六

尾野川勘平

○小山清左衛門

實六

小山田左衛門

同 三津根

何某店

○杉野九左衛門

實六

杉野十平次

○渡辺七平次

實六

志保多助左衛門

同 婦辰根

逢老町米谷某店

○米谷常三郎

實六

米谷伊助

右長春木と綿糸を物に賣りしと

○小豆屋善三郎

實六

小豆屋善三郎

始末扇子と賣後入穀也菓子に賣

猶外小豆を賣り義堂の人々主とありて

今日位所を精治業を習安を賣りて

肉外とありて宿屋忠長計略種く

らむ位所も精野よきうしと



今更らふもあつねども 甲余人の忠臣義士を討つるも
人のあふふと評にべし 後世も忠義義孝なるを賞する人多
けれど忠孝全くとははふと申され切後とて公道をまねば則
礼はとらるゆゑ義を切られれば刑よるると賞賜の復討代
ふもまは後世もあつねども 人傑をたふすべし
何れもは皆徳の世の中は死ぬるをうらむを言ふのけつと絶せし
舟の量りも 何れも死ぬるを公の言とて言ふれば命
むも後世もあつねども 甲余人の忠臣義士を討つるも
人のあふふと評にべし 後世も忠義義孝なるを賞する人多
けれど忠孝全くとははふと申され切後とて公道をまねば則
礼はとらるゆゑ義を切られれば刑よるると賞賜の復討代
ふもまは後世もあつねども 人傑をたふすべし

城を抗ふ討死せんと書或ハ殉死を遂んと安んずる者又ハ
其のちを待てる 恥ぢやうれが 追討 追討 追討
言一者凡百余人ありしが 既小道義を棄して千餘人 勝
追まは遠盟の者六十余人 是等の人も 奉命ハ君臣の誅
重きを思ひし列人入るも ままが 命の惜一けり 命の惜一けり
あつても物を遠く逃原う者多し 義士の多きは
追まは遠盟の者六十余人 是等の人も 奉命ハ君臣の誅
重きを思ひし列人入るも ままが 命の惜一けり 命の惜一けり
あつても物を遠く逃原う者多し 義士の多きは
追まは遠盟の者六十余人 是等の人も 奉命ハ君臣の誅
重きを思ひし列人入るも ままが 命の惜一けり 命の惜一けり
あつても物を遠く逃原う者多し 義士の多きは

實は絶世の人傑古今をしのぐ忠臣といふべし 一人くみ

○不破勝左衛門

四十年必承の浪人あり

○風子新六

十四年春二月の浪人あり

○風子新六 風間喜多勝が次男少く叔父の里村侍左衛門

養子とすう養父ととも浪人き東小むりて遊元但勿假

の海軍中堂又助といふ人の新小食客とありてありれ

塩谷の録とつけたるありざれども突の父と并に

兄十次郎が美堂とありて六星之種くと親て盟の

連中ふ加らうー英勇あり

○園野九十郎

追盟の人改めて二代の金あり

○佐藤長助

改めて二代の金あり

右の如き義公の人といひ引きて遠盟の者六十七人あり但ふ

名目の中へ不義不忠とも定む親き異説の士十余人あり

夫ハ拾遺といへるうーくおへ下先約米とて遠て盟を破りし

面とてを傳ふありせむ

真野好盛

高谷浅左衛門

進藤源四郎

河村信左衛門

小山源兵衛

植谷源左衛門

田中権左衛門

佐藤信左衛門

長津守左衛門	長次左衛門	多喜左衛門	豊田八太夫
各勢八右衛門	里村伴左衛門	臨山守左衛門	榎本新助
灰方藤左衛門	上野弥助	波辺覚左衛門	山正安左衛門
幸田守左衛門	仁平左衛門	波辺佐左衛門	川田入左衛門
久下織左衛門	猪子理左衛門	田中右衛門	酒寄佐左衛門
梶半左衛門	高久長左衛門	松本新左衛門	近松貞六
園本次左衛門	田本左八郎	田中代左衛門	進藤源吾
大石孫四郎	川村太右衛門	田中麻左衛門	垣屋武左衛門

三輪光左衛門	三輪孫九郎	小山孫六	井口半藏
山羽理左衛門	嶺善左衛門	木村孫左衛門	松野新助
猫左衛門	田軍左衛門	小幡孫左衛門	木村信左衛門
松浦順左衛門	井口忠左衛門	生野十左衛門	上田平左衛門
半野半平	佐々小左衛門	中野信左衛門	中村清左衛門
鈴田重八	田中貞四郎	矢野半助	月屋信左衛門
毛利小平太	小山田左衛門	瀬尾孫左衛門	

夜の六十七人又とむぐく畧説あり藤ふ美武王の守ありけり

狂文亭為永春江
狂詠舍為永春曉
淨書 瀧野音成

為永運校著

江戸狂訓亭為永春水撰

江戸史
實傳
いろは文庫卷之九了

